

水産海洋地域研究集会 第12回 伊勢・三河湾の環境と漁業を考える

「湾内の干潟・浅場再生を考える」

清水康弘，羽生和弘，国分秀樹（三重県水産研究所）
蒲原聡，中村元彦（愛知県水産試験場）

第12回「伊勢・三河湾の環境と漁業を考える」が2016年12月3日（土），三重県総合博物館（MieMu）において「湾内の干潟・浅場再生を考える」をテーマに開催された。水産海洋学会員，研究者，漁業関係者，大学関係者，一般県民，国省市行政職員など総勢107名の参加があった。

まずテーマ1では，永尾謙太郎氏（(株)いであ）から，伊勢湾再生推進会議の中で中部地方整備局が開発した数値モデル，「伊勢湾シミュレーター」に関する報告があった。その中では，近年伊勢湾の貧酸素水塊は拡大傾向，クロロフィル濃度は減少傾向にあり，海の「豊かさ」が失われつつあるとのこと。また貧酸素水塊の縮小には，陸域負荷の削減と干潟・藻場再生が有効であり，前者については，貧酸素水塊の縮小と共に貧栄養化が併発するのに対し，後者は生物生息場の創出により，生物生産性を維持しつつ，海底に堆積する有機物を抑えて貧酸素水塊を縮小させる「豊かな海」を実現するための施策であることなどが紹介された。

その後「近年の干潟浅場再生事例」として，伊勢湾と三河湾で行われている，湾周辺で発生する様々な土砂を活用した干潟浅場再生についてそれぞれ報告が行われた。まず高田智明氏（中部地方整備局木曾川下流河川事務所）は，長良川の河道浚渫により発生した土砂を有効活用し，木曾川河口域に造成された人工干潟の約20年間の長期調査データの結果，貝類をはじめ様々な底生生物が生息できており，生態系において天然の干潟と同様の役割を果たしていると報告が行われた。三崎隆央氏（中部地方整備局名古屋港湾事務所）は，名古屋港内の航路維持浚渫で発生する土砂を有効活用し造成された人工干潟について，物理的な安定性と生物生息状況について報告があった。泥質土を中詰め材とし，表層を覆砂した造成干潟でも，港内の低波浪状況下では，造成後安定な生物生息環境を創出でき，多くのアサリの定着が確認できたとのことであった。清水康弘氏（三重県水産研究所）からは，漁場改善のための河口域の作濡により発生した土砂を有効活用し，アサリの浮遊幼生の流れから生活史を考慮して，湾北部にアサリ漁場を造成した調査結果について報告がなされた。さらに，蒲原聡氏（愛知県水産試験場）は，矢作川ダムの堆積土砂の漁場造成材としての活用可能性について現地実験結果の報告があった。その中では，場を安定させるための粒度をはじめ，生物生息環境を維持するための覆砂層厚，さらには堆積土砂を活用する際の課題についても紹介された。南部亮元氏（水産研究教育機構 水産工学研究所）は，伊勢湾沿岸域のアサリ資源調査の結果から，ロジスティックモデルを活用したアサリの生息に適した場の選定に関する報告があり，高波浪域でもアサリの定着を安定させるための，新しい碎石覆砂の紹介も行われた。

総合討論では，伊勢湾内の大規模干潟・浅場再生の推進について，課題と対策の整理を行った。湾内で大規模な干潟浅場再生を実施するためには，良好な生物生息環境を創出する技術に加え，造成適地の選定と良質な材料の入手が不可欠であること，またそのためには，土砂の有効活用についての目標や方法について水産分野だけでなく伊勢湾沿岸域の関係者（港湾，河川部局など）による縦割りを超えた真摯な論議が必要であることの共通認識を得た。

来場者からは，「干潟・浅場再生に向けての各機関の連携のきっかけが作れたのではないかな」，「干潟の回復について、各地で別々の取組みがなされていることがわかった」，「多様な主体や予算・事業で同じような研究・調査をしているので，このような集会で調整できると良い」等の意見が出され，伊勢湾再生への関心の高さと，海域環境との関連も含めた継続的な取り組みの重要性が認識された。



写真 研究集会の様子